

P.10 富士山大沢崩れの変遷

富士砂防工事事務所 時田 和廣

○石田 勝志

国際航業株式会社 中筋 章人

西川 茂

1. はじめに

富士山大沢崩れを対象とした調査研究は、過去に様々な種類のものが実施されてきた。しかし、未だに大沢崩れのどこで、どのぐらい、どのように崩れているかが明確にはなっていない。そこで本研究は、過去22年間にほぼ毎年のように撮影している空中写真を用いて、図化機による計測と空中写真判読をおこない、大沢崩れの変遷をわかりやすく把握することを目的としたものである。

2. 計測に用いた空中写真の時期

各時期のものを計測すると膨大な作業量となるため、右に示すように、4～5年おきの5時期分を選んで実施した。また地形図は、昭和51年と62年に作成したものをベースとした。

撮影年月日	縮 尺
昭和46年11月	1 : 5,000
昭和51年9月	1 : 8,000
昭和54年10月	1 : 8,000
昭和58年11月	1 : 8,000
昭和62年8月	1 : 8,000
平成5年10月	1 : 8,000

3. 計測方法

解析図化機を用いて、まず各時期の急崖線を平面図（縮尺1 : 1,000）にプロットした。これを重ねあわせることによって、崖の後退（崩落線）の著しい場所とその幅が各時期毎に把握できる。つぎに代表的な断面で空中縦横断測量を実施した。これを重ねあわせることによって垂直方向の変位が把握できる。

4. 計測結果

計測結果の一部は図-1に表示するが（ポスターセッションでは拡大したものを展示する予定）、ほぼ次のような事が判明した。

- (1) 岩盤崩壊の最も激しい箇所は、標高3,400m付近であり、とくに左岸では過去22年間で30万㎡の岩塊が崩壊し、しかもその多くが昭和47年前後に短期間で生産された。また右岸では、毎年のように連続的に崩壊が進行し、過去22年間に約20万㎡の岩盤崩壊が発生している。
- (2) 大沢崩れの中部（標高2,600～3,200m）では、左右岸で崩壊の形態が異なるものの、日常的に岩盤崩壊が進んでおり、とくに左岸では段階的に溶岩層の崩落が進んでいる。
- (3) 大沢崩れの下流部では滝の後退とその周辺部の崩壊が顕著である。とくに過去22年間で2の滝で20m、3の滝で10mもの後退が計測された。
- (4) 大沢崩れでの岩盤（地山）からの崩壊量は、過去22年間で平均すると1年当たり約9万㎡となった。また大沢源頭部からの流出土砂量は、年平均で約19万㎡であった。

